

No.3027

The Politics of War-related Heritage in Contemporary Asia

- Promoting Reconciliation or Stoking Tension?

九州大学 人間環境学研究院 教授

VICKERS Edward Anthony

りそなアジア・オセアニア財団 2019 年度国際学術交流助成により、平成 31 年 9 月 5 日(木)から 6 日(金)にかけて、国際シンポジウム「The Politics of War-related Heritage in Contemporary Asia」(アジアの戦争関連「遺産」をめぐる政治力学)が福岡市九州大学西新プラザにおいて開催された。本シンポジウムには、アジアをはじめ、アメリカ、イギリス、オーストラリアなど計 9 か国及び地域の 24 名の研究者、NGO 関係者、映画監督を含む、約 70 名の来場者があつた。「アジアの戦争関連遺産をめぐる政治力学」の表題の下、7 つのセッション(歴史と公共文化、紛争を記念する教育、国家によるプロパガンダと博物館など)を設け、研究分野の垣根を超えて有意義な発表と議論が行われた。

第一日目(5 日)は、三つのセッションを構成し、太平洋戦争の原爆、空襲などの記憶を文学作品、教科書、歴史遺跡や博物館の視点から議論が進められた。第三セッションでは「慰安婦」をめぐる紛争遺産問題を取り上げ、日中韓三カ国の研究者から研究成果の発表が行われた。続いて、4 月 20 日から公開され話題になっていた挑戦的なドキュメンタリー「主戦場」が特別公開として会場で上映された。事前に西日本新聞に記事が掲載され、一般市民を含む 50 人が観賞した。その後、シンポジウムの主催者である九州大学のエドワード・ヴィッカーズ教授とミキ・デザキ監督との対談が行われた。質疑応答の時間も設けられ、有意義な議論が展開された。第二日目も三つのセッションから成り、日本、台湾、マレーシアやフィリピンなど各国の戦争関連遺産の形成及び市民運動についての報告がなされ、戦争の記憶と平和への認識が討議された。

この度の国際学術交流助成を通じて、アジアの戦争記憶の研究分野での学術交流の人的ネットワークが育成された。特にアジア・オセアニア地域以外の研究者との交流を促進することができた。本シンポジウムの開催により、歴史的、政治的、社会学的及び文化的要因がアジアの戦争関連遺産にどのような影響を与えたかの理解を深め、今後この学術分野における知的交流と研究の発展だけではなく、アジアの相互理解や平和構築にも寄与できることを確信する。